



文/池谷知啓 いけや ともひろ  
 つながる部 フェイスブック・シティ課  
 静岡県出身。2004年日本大学卒。航空関連会社に  
 従事後、株式会社AIR DO(エア・ドゥ)にて空  
 港旅客サービス、パイロット乗務管理等を経験。  
 妻が佐賀県出身であり、武雄市の取り組みや豊か  
 な環境に興味を抱き、2012年武雄市役所に入  
 庁。営業部観光課を経て、2014年4月より現職。

## 武雄を知る、誇る、活かす

そんな全国的にも注目を浴びるであろう武雄の洋学資料は、現代人、とりわけ武雄市民に何を訴えかけているのか。「昔の武雄はかつよかった。」ではない。現代に至ってもその資産が残り、その土地において資産を活かした歴史を語るストーリーを持つている、これこそが、他のどこにも無い武雄が誇るべきことではないだろうか。

だからこそ、小さい子供の時にまず知ってみたい。茂義のような絶えず何かに夢中になれ

る精神を育む。青年になって、壁を超える勇氣をもらおう。そして、武雄の歴史に誇りを持ち、社会に向けて、世界に向けて羽ばたいていく。武雄だからこそ出来るそんな知のレイが、後生にも知のバトンを託すことになるのだろうか。

時代の流れに沿って、武雄の洋学資料は武雄の人々と共に歩んできた。それはきつと武雄の人となりを確実に作ってきたのだろう。今の武雄市も茂義の時代と似ている、外から

来た私にしてみると、そんなことも感じたりするのだが、それもきつと歴史がおりなす綾なのだろう。

私は富士山麓に住みながら、富士山に登ったことが無かったのだが、ここ武雄の蘭学・洋学も今まで知らなかった。それがもったいないと思わずにはいられない。まさに灯台もと暗し。7月の正式な文化財指定の際は、たくさん洋学資料が脚光を浴びる。そのときは必ず私も足を運んでみよう。子供と一緒に。



科学など分野ごとにまとめられた洋書。取材中に見つけた、各洋書の随所に挟まれているイチヨウの葉。しおりとしてか、防虫作用なのか、歴史資料の趣きを感じさせる。